

2019.9.19  
vol.79

# シネマ・ド・リぶらの コラム・ド・シネマ

映画  
を  
読む

## 本日の上映作品『自由を我等に』



9月19日(木)

① 10:30 ~ ② 14:00 ~ ③ 18:30 ~

同じ刑務所の仲間であるルイ(レーモン・コルディ)とエミール(アンリ・マルシャン)は脱獄を企てるが、要領のよいルイだけが成功し、彼は巨大な蓄音機会社の社長にまで出世する。一方、刑期を終えたエミールは、一目ぼれした娘をきっかけにルイの工場で働くことになる。初めはエミールを金で厄介払いしようとしていたルイも彼の友情を取り戻すのだが、その後…。

監督：ルネ・クレール

出演：アンリ・マルシャン、レイモン・コルディ  
ポール・オリヴィエ

製作：1931年 フランス モノクロ 86分

『明るい鏡』ルネ・クレールの逆説	武田 潔／著	早稲田大学出版部	778.235
『字幕の名工』秘田余四郎とフランス映画	高三 啓輔／著	白水社	778.09
『幻影シネマ館』	佐々木 譲／著	マガジンハウス	913.6
『談志映画噺』	立川 談志／著	朝日新聞出版	778.04
『シネマディクトJの映画散歩』フランス編	植草 甚一／著	晶文社	778.2
『フランス映画史の誘惑』	中条 省平／著	集英社	778.235
『映画100年STORY まるかじり フランス篇』フランス映画快作220本		朝日新聞社	778.2
『映画でお散歩パリガイド』	ジュウ・ドゥ・ポウム／著	ジュウ・ドゥ・ポウム	778.235
『見ずには死ねない! 名映画300選』 この映画のここが面白い 外国編	黒川 裕一／著	中経出版	778.2
『リラの門』	ルネ・クレール／監督	IMAGICA TV	778.253
『巴里の屋根の下』	ルネ・クレール／監督	IMAGICA TV	778.253
『夜の騎士道』	ルネ・クレール／監督	IMAGICA TV	778.253
『そして誰もいなくなった』	ルネ・クレール／監督	IMAGICA TV	778.253

## コラム『自由を我等に』

### “頑張らない生き方”を清々しく描いた作品 K.M.

今回の上映作品は、『巴里の屋根の下』(1930年)、『巴里祭』(1933年)などで有名な、フランスのルネ・クレール監督の『自由を我等に』(1931年)です。ルネ・クレールにとって、トーキー映画は2作目で、役者の演技や演出はサイレントのコメディ映画のそれを踏襲しており、セリフは最小限で、人々がいきなり歌い出したりするので「あれっ」とびっくりされるかもしれません。一見ミュージカル風コメディなので手軽な作品の感じがするのですが、実は高度に産業化していく社会の中で、「自由」を求める努力が逆に「不自由」を促進する皮肉を風刺し、そのような社会での生き方を提言するという、結構深い内容の戦前フランス映画を代表する名作です。

主人公は 自由を夢見る囚人仲間のルイ(アンリ・マルシャン)とエミール(レイモン・コルディー)。この二人が脱獄を企てるのですが、一人は成功しもう一人は発見され未遂に終わります。脱獄に成功したルイは商才を如何なく発揮して、一流の蓄音機会社のオーナーにのし上がります。一方、刑期を終えて出所したエミールは、やれやれと野原で寝そべっているところを警官に見つかり、「遊んでいてはいかん」とまた留置所に放り込まれてしまいます。しかし、悲観して首を吊ろうと縄を結んだ窓の鉄格子が壊れて、運よく留置場から抜け出し、ある工場への求職者の列に紛れ込むと、そこはかつての仲間ルイの経営する蓄音機製造工場でした。

ここでエミールは、この工場に勤める女子社員ジャンヌ(ローラ・フランス)に一目惚れして、徹底的にオートメーション化されたこの工場で働くことになります。ベルトコンベアーの流れ作業のコミカルな描写と、労働者の列が工場内をロボットのように移動する不気味な描写の際立ったコントラストがとても印象的です。ルイは、初めは前科を知るエミールを警戒し厄介払いしようとはしますが、エミールがピストルの脅しにも金の誘惑にもぐらつかずに親しみを寄せるので、二人は友情を取り戻します。その後、経営のゴタゴタがあってルイの前科がバレてしまい、エミールの方も

ジャンヌに実は恋人がいることを知ってガックリします。そして、新工場落成式のドタバタ騒ぎの混乱に乗じて二人は姿を消します。翌朝、着の身着の儘の二人が野原の直線道路を歩いていると高級車とすれ違い、思わず振り返ったルイの尻を、エミールが蹴ります。そして、ルイが蹴り返す。二人は蹴り合いながら遠ざかっていき、風まかせの「自由」で気儘な二人の放浪の旅が始まります。

なんともんびりしたストーリーで、今から見れば時代離れたオプティミズムにはちょっとついていけない気もしますが、この作品は「1932年第1回ヴェネツィア国際映画祭金獅子賞」や「1932年第9回キネマ旬報ベスト・テン第1位」を受賞していて、チャップリンが『モダン・タイムス』(1936年)の製作にあたって、この作品からヒントを得たという話などもあります。

この作品が製作された1931年頃は、二つの大戦に挟まれた重苦しい時代であると同時に、産業技術革新によってももの作りの大量生産が可能になり、「人間のロボット化」への心配が顕在化し始めた時代です。「富や名声や恋愛を苦心惨憺して求めるよりも、日々をのんびり過ごすことの方が楽しい!」という、“頑張らない生き方”を賛美するルネ・クレールのこの作品に共感するムードが、ヨーロッパ(特にフランス)でも日本でも、相当強かったのではないかと思います。

さらに、「自由」を求めて「不自由」になっていく人間の姿は昔も今も変わらないことを考えると、“頑張らない生き方”に対する共感を決して古びていないという気がして、この作品以外の“頑張らない生き方”を描いた作品を調べてみると、結構いろいろありました。『素晴らしき放浪者』(1932年)、『僕の叔父さん』(1958年)、『ぐうたら万歳!』(1969年)、『オブローモフの生涯より』(1979年)、『クリクリのいた夏』(1999年)など。『オブローモフの生涯より』がロシア映画、それ以外はすべてフランス映画でした。また、最近のユーザーレビューを調べてみると、これら作品群には、若いファンが結構いることが分かりました。

## 8/22 『ティファニーで朝食を』の感想

・ズーっと憧れ、恋焦がれた映画に出会い、最高でした。最後はハッピーエンドでしたが、恋の行方はなかなか不思議なものです。日本人らしい人の描き方が残念。オードリー・ヘップバーンの存在はスクリーンを圧しますね。晩年はアフリカの孤児のために捧げた「大きな愛」の持ち主だったと改めて思い出しました。

・オードリー、かわいくてきれいで大好きです。ジョージ・ペパードもかっていい！お二人とも年を重ねても素敵な俳優さんたちで、私も恋したいです（笑）道德的なことはさておき、とても楽しい、ドキドキする大好きな映画。ありがとうございました！

・オードリー・ヘップバーンの素晴らしい演技に感動。最終シーンに涙。愛ではじまり、愛で終り、またはじまる。感動しました。

・『ティファニーで朝食を』は2回目です。素晴らしいシネマですね！今年6月にニューヨークへ行ったとき、5番街のティファニーにも行きました。このシネマのシーンを思い出しながら。

・若い時と違って、心に沁みました（ラストが）。

・結構シビアな映画なんだ。ラストシーンに泣けたね。

・人間は自由だと思って暮らしているけれど、違って、自分の枠の中で生きているということだと思う。自分を解放することはなかなかできないが、本当の自由は自分でつかむことかな？

・幾度観てもよい作品はよいですね。大好きなオードリーを大きな画面で観させていただいて感謝します。

・ヘップバーンはきれいな。日本人らしい人の描き方が残念。アメリカの人は日本人をあんな風だと思っていたのか！！

- ・アメリカ社会の陽気さも哀しさもよく出ていました。
- ・久々に、現実から逃避できて楽しかったです！
- ・再度見せてもらえてよかったです。また見に来ます。
- ・楽しい映画の時間 39ー。
- ・上映前に流れている BGM の題名をテロップで教えてくれると嬉しいです。懐かしい曲ばかりですが、どうしても思い出せなくて、ムズムズです。役が上手なのでしょう、ヘップバーンの見方が変わった。
- ・猫の演技がすばらしかった。ファッションもすばらしかった。人生はお金ではないですね。よかったです。

## P 駐車場ののご案内

りぶら東駐車場2をご利用下さい



注意



上映中の携帯操作は、周りの方の迷惑になりますのでご遠慮下さい。また、観賞マナーを守り、終了後も明るくなるまで席を立たないようにお願いします。上映開始時間を過ぎての入場は、ご遠慮ください。

### サロン・ド・シネマについて

ホールホワイエにて寄付金でお茶菓子の提供をしています。映画の上映前にご利用ください。但し、「夜の部」には開催しません。

りぶらホールにはヒアリングループが設置されています。補聴器を利用されている方は、Tモードに切り替えてください。



## 第80回上映会のご案内

# 終着駅

字幕上映

STAZIONE TERMINI



10月17日(木)

① 10:30 ~ ② 14:00 ~ ③ 18:30 ~

夫と子をアメリカに残しローマにやってきた一人の女性が、そこで恋に落ちたイタリア青年の懇願を振り切って去って行くまでを、“終着駅”に集う様々な人の人生を点描しながら物語る。淡々とした映像が昂まってラストの哀切は筆舌に尽し難いほど。物語の進行と上映時間が一致した実験的な側面も持つ。

監督：ヴィットリオ・デ・シーカ

出演：ジェニファー・ジョーンズ  
モンゴメリー・クリフト

製作：1953年 アメリカ/イタリア  
モノクロ 89分

### 2019年度の上映のご案内

(上映作品は変更になる場合があります。)

2020年1月～3月ホール改修工事のため、  
2019年度の上映会は下記の通りとなります。

第81回	11月28日(木)	『キリマンジャロの雪』
第82回	12月19日(木)	『ビューティフルメモリー』
2020年度		
第83回	4月16日(木)	未定
第84回	5月21日(木)	未定
第85回	6月25日(木)	未定
第86回	8月20日(木)	未定
第87回	9月17日(木)	未定

### 上映前 BGM のタイトル

タラのテーマ (風と共に去りぬ)  
黄色いリボン  
第三の男  
雨に唄えば  
愛のロマンス (禁じられた遊び)  
ジェルソミナ (道)  
エデンの東  
ケ・セラ・セラ (知りすぎている男)  
ボギー大佐 (戦場にかける橋)  
荒野の七人  
太陽がいっぱい  
トウナイト (ウエストサイドストーリー)  
ムーンリバー (ティファニーで朝食を)

上映開始時間を過ぎての入場は、ご遠慮ください。